

驕奢と哀しみ

西園寺と川端

山本壽夫

(一) 西園寺

巨大都市名古屋の喧噪を遠く北に離れて、山間静寂の地に横たはるもの、これを入鹿の池とする。その池畔林間小高き所に点在して集落をなすもの、これを名付けて明治村といふ。競ひたつ建造物、いはく学校、いはく病院、教会、銀行、兵營、郵便局、料理店および明治を代表する有名な建造物はすべてその種類をあげて此所に集合した観がある。それら殆んどすべて明治文明開化の洋風であるなかに、池畔近き斜面、小高く眺望よろしき所を得て和風瀟洒な邸宅がある。これかつて静岡県は興津にあったもの即ち坐漁荘である。この邸宅の旧主人、いはずと知れた老公西園寺公望その人であつてこれに住まうて悠悠自適するが如くにして、いながら天下に漁して政界を睥睨し、己の意のままに国政を操縦した所である。老公、大正十一年山県有朋八十五才病を以て薨じ、維新の元勳殆んど皆姿を消し去つた後は、門地声望比類なき元老として、国政の重要事項すべて御下問にあづかり、往時の撰関の勢威を想はしめたのである。老公は大正後半より昭和前半にかけては絶対最高の指導者であり、いやしくも政界に雄飛せんとする者、官界に栄進せんことを望むものはこれが御機嫌を損してはならず、およそ総理大臣として国政を左右せんとするには、文字通りこの人の許諾なくしては全く不可能に属することであつたのである。この西園寺公望公について今注目しておかねばならぬことがある。^{註一}「日本の非劇と理想」に依つて述べると、そもそも明治維新を導き出して来た精神が尊王攘夷であり

我が国体に対する至深の景慕であり献身であつた事は勿論である。西園寺公は嘉永二年十月に徳大寺公純の次男として誕生し、幼にして西園寺師季の養子となり、やがて慶応三年王政復古にあふて参与に任命され、翌明治元年二十才にして権中納言に任ぜられ、山陰道鎮撫総督、東山道第二軍総督、越後口征討大参謀として錦旗を奉じて各地に進撃し、長岡城を陥れ、会津征討に加はり、越後府知事に任ぜられているのであるから異例の昇進であるとともに、「前社長西園寺公望君ノ小伝」に「大納言公宗ナルモノアリ陰ニ北条氏ト謀リ非望ヲ企テ一身遂ニ天下ノ剽トナル。(中略)此時二方テ鞠躬勉強、身ヲ以テ天下ノ先トナリ、朝威ヲ挽回シ、百姓ヲ撫慰シ、再ビ青天白日ヲ仰グノ皇國タラシメン事、是予ガ一ハ累世ノ朝思ニ報ジ一ハ家門ノ醜名ヲ洗滌スル好機ト云ベキノミト、聴モノ驚怖ス。干時年末ダ十歳ニ滿タズ」とあるやうに先祖公宗謀叛の企により死刑に処せられた事を知り深く之を恥ぢ、忠勤をぬきんでる事によつて家門の名譽を挽回しようとする奮勵勉強して、ここに至つたことを認めれば、彼も亦明治維新と一体不可分であつたと見てよいであらう。しかるに驚くべきことがある。彼は間もなく官を辞して、木戸孝允岩倉具視の勤める所によつて、明治三年フランスに向ひ、パリに遊学する事十年に及び、明治十三年十月帰朝した時には、ルソーによつて立てられた自由思想の使徒として現れ、翌年三月には中江兆民・植木枝盛等とともに東洋自由新聞社を創立して、それが社長となり東洋自由新聞を創刊して、フランス直輸入の自由思想を天下に鼓吹宣伝するのである。そしてその社説においては、政府にして若し人民の自由を妨げるならば、大喝一声、手に唾して起ち蹴破して過ぐるあらんのみと脅迫するに至るのである。これ即ち暴力革命の企圖を内に包蔵する所の自由思想の宣伝であつて明治維新の精神と遠くはなれたものであることはいふまでもないことである。しかしなが

ら又驚くべきことは、勿論これに当惑した政府当局の誘導もあったのであろうが、明治十四年四月八日には社長を辞職して東洋自由新聞社より脱退するのであるが、それより数日たつと前掲の小伝の記事が見えることである。正に不思議といふほかはない。それより十余年沈黙の後明治二十八年には外務大臣として文部大臣、三十九年、四十四年と二次にわたって総理大臣として内閣を組織し、大正に入つては元老として重きをなしたことは前述の通りなのである。之を要するに西園寺公望は幼少にして比類なき思寵を朝廷よりうけ弱冠にして抜群に高き榮譽の座に就くことを許されたにもかかはらず、外遊十年帰朝後はフランス革命の洗礼を受けて自由思想の宣伝鼓吹に熱中するに至り、間もなく東洋自由新聞社を脱退して、沈黙十余年大臣を歴任し、総理大臣として国政を左右すること二回、ついで元老として政官界を睥睨するに至る、といふのであるからその変転驚くべきものであるとともに、常に榮譽と名声の最高の座に就いてゐたことにも驚嘆せざるを得ないのである。が又その根本の思想に於て日本を遠くはなれ、明治維新を導き出した精神と著しく異つたものであることも注意しておかねばならぬ。

当時の国民は西園寺老公が如何なる思想をいだくものであるかを知らず、又その進退まことに不思議は不思議であつても、ともかく「西園寺」の名を知らぬものはなかつたのである。さてそれならば「西園寺」とは一体如何なるものであらうか。再び前掲の「西園寺公望君ノ小伝」にもどれば「太政大臣公経ヨリ五世ノ間、外戚ノ貴ヲ挾ミ、位人臣ヲ極メ、権朝野ニ震フ。降テ大納言公宗ナルモノアリ。陰に北条氏ト謀リ、非望ヲ企テ、一身遂ニ天下ノ戮トナル。縱令其年代久遠ナルモ、其事ハ載テ青史ニアリ。予幼稚ナリト雖トモ、苟モ先祠ヲ奉ズルモノナリ。豈此耻辱ヲ雪ガザルヲ得ンヤ。云云」といふ、その公宗を先づ見るに、元弘三年五月鎌倉陥つて北条高時

亡び、六月後醍醐天皇京都に還幸あり建武中興の御代となるのであるが、公宗は高時の一族を取立てて幕府を再興し、之と連繫して天下の政治を意の如くしようと思ひ、高時の弟が西園寺家をたよつて来たのを還俗させて畿内の大将とし、時行を関東の大将に、名越時兼を北国の大将として、公宗自身は後醍醐天皇を北山の邸に御迎へして、ひそかに図り奉らうとしたのであるが、挙兵の時機をさし迫つたところで露見し、公宗は、日野資名、同氏光、三善文衡等とともに捕へられ、時行信濃に兵を挙げて武蔵に攻め入り、足利直義鎌倉を棄て脱出するの注進京都に達した頃、即ち八月二日死刑に処せられてゐるのである。西園寺公宗は何故にかかる大事を企てたのであるか、又その北山の邸は如何なる性質のものであるか、之を検討するには建武より溯る事百十余年の昔を見ねばならない。後鳥羽・順徳両上皇鎌倉幕府を倒し朝権の回復をなされようとされた時、第一の処置は、常に幕府と通謀する西園寺公経及びその子実氏の禁錮となつたのである。朝廷の此御企てを、いち早く幕府の伊賀光季に告げた者は公経であり、光季の飛脚が鎌倉への第一報であつて、第二報はそれより一刻遅れた西園寺家の家司主税守長衡の飛脚であつたのであるから、公経と幕府との結託は如何に緊密であつたかは察せられるであらう。而してこの承久の御企て官軍の惨敗に終るや、公経は幕府の後援により太政大臣の栄位に昇り、北山に別荘を建てて之を西園寺と名付けたのであるが、その榮華を極めた有様は増鏡に次の様に記しておるのもわかるであらう。

本堂は西園寺、本尊の如来は、誠に妙なる御姿、生身もかくやといくいくしう顕され給へり。…(中略)…かの法成寺のみこそいみじきためしに世継も云ひたんめれど、是れは猶山の景気さへ面白く、都はなれて、眺望添ひたれば、云はむかたなくめでたし。峰殿の御舅、あづまの將軍の御おほちにて、よろづ世の中御心の

ままた飽かぬ事なくゆゆしくなむおはしける。

峰殿とは摂政九条道家、その夫人は公経の女。あづまの將軍は藤原頼経、道家の子であり公経の孫になる。公経の夫人は頼朝の姪であるといふ。頼経はかういふ血縁で鎌倉に迎へられたのであり、又公経はこの血縁関係によって鎌倉幕府と結託して、朝廷に重きをなし北山に別荘を建てて西園寺と名付け、ここに豪華きわまる生活をおくったのである。しかも後鳥羽上皇が隠岐に、順徳上皇が佐渡に流謫幽囚の御身の日日を涙と共に送らせ給うてゐる時である。公経の子実氏も太政大臣に任じ孫公相もやがて太政大臣となり、その子実兼もまた太政大臣に任じて後西園寺と呼ばれ、その実兼の曾孫が公宗であつたのである。以上長きに失するを厭はず「日本の悲劇と理想」に依據しつつ西園寺に就いて述べ来たのは、西園寺なるものは、時につまづき、一時の雌伏はあるものの、常に巧に政治的の勢力に亘つて結託・遊泳し、其の間に身を処することまことに巧妙に、常に榮譽の地位を確保して、他の悲劇を顧みず、涙もあはれもなく、豪奢の生活を送り続けたものである事を銘記しておきたかゝたに過ぎないのである。而して一般に、中世の歴史に就いて多少とも知識を有し、関心を寄せる者が、およそ北山といへば如何なることを連想し、西園寺と聞けば如何なる印象を受けるか、といへば、以上の如きものにならざるを得なかつたことを注意しておきたかゝたからである。

(二) 夢窓疎石

公経の北山の別荘西園寺歴代豪奢を極めたものであつた事は既に述べた。之をうけて、大いに土木を起して、今の金で数億或は十数億円もの巨費を投じて足利義満は金閣寺を建立するのであるが、之が驕奢は以前に二倍三倍することはいふまでもない。彼は南北両皇

統を交互に御位につけ奉るといふことを条件とし、南朝を誘ひ南北合一の話をまとめ天下統一の業を成して、三十七才にして太政大臣に任ぜられ人臣の栄位を極め、子義持は征夷大將軍である。彼はこの北山の新亭に紫宸殿、公卿の間を造り、あるまじき非望の包蔵を思はせるのであるが、南北合一の条件は之を實行せず、あざむいて吉野の君臣を逆境におとし入れるのである。このことを考へると、北山の地に如何に壯麗の楼閣林立し、庭園山囲み水めぐり、名花・異草・奇石・怪松各々その処を得たりと雖、五山の禅僧どもの如く之を讚美ばかりしてはおられまい。ただし奇石怪松、各々其処を得たりと禅僧に讚美されるのであつてみれば、この庭園贅を尽したものであつて、その作庭を指導したものは禅僧か或は特殊の専門家であつたらう。彼等は太極夢窓疎石の遺風を汲み、これまでの庭園が自然の景色の写実であつたのに対して、抽象的、象徴的なものとなし、深き哲理を蔵する幽玄なものとしたと一般に考へられてゐる。そこで今夢窓疎石について考へてみなければならぬ。彼について誰しも考へるのは、天龍寺であり、又西芳寺であらう。太平記によつて著明な話であるが、天龍寺は、足利尊氏がきわめて篤き思寵をいだきながら叛いて非常な苦難におとし入れた後醍醐天皇の冥福を祈らんが爲に、龜山殿の旧跡に建立して、夢窓を開山としたといふのであるが、「此開山国師、天性水石に心を寄せ浮萍の跡を事となし給ひしかば、水に傍ひ山に依り、十億の景趣を作られたり……此十景の其上に、石を集めては煙雨の図、草偃が山水の景にも未だ得ざりし風流なり」といふことになつて一千人の僧をここに置き上皇の臨幸を仰ぎ盛大な供養を行はうとして国々の大名に役を仰付けてゐる。それは深山幽谷に簡素な生活をするのが道人の姿であるべき筈であるのに、疎石ひとり之にそむき、俗士の奢侈にも過ぎたる驕

りの生活をなし、政權に近づいて將軍の意を迎へる態度、まことにいやしむべきものとして排斥してゐるのである。朝廷に於いては、この叡山の反対につき評議があつたが日野資明の意見は「抑も禪宗の模様とする處は、宋朝の行儀、貴ぶ處は祖師の行迹なり。然るに今の禪僧の心操法則、皆是に相違せり。——(中略)——只今父母の養育を出でたる沙弥喝食も、兄を超え父を越えんとする志あり。是れ先づ仁義礼智信の法にはづる。曾て宋朝に例なし。我朝に始まれり。言は語録に似て、其宗旨を説く時は、超仏越祖の手段ありといへども、利に向ひて他の権貴に媚ぶる時は、檀那にへつらひ、富人に下らずといふことなし。身には五色をかざり、食には八珍を尽し、財産を投げて任持を望み、寄進と号して沙汰を寄する有様、誠に法滅の至りと見えたり。」といふのであつた。ここに疎石に対する俗士にも過ぎたる奢り、権力に巧に媚びへつらふとの批判は注目しておかねばならない。かかる心術の者が奇木怪石を集め作庭の意匠を凝らしたのが天龍寺・西芳寺であり、それらの流れを汲むものが西園寺であり、鹿苑寺金閣なのである。

ここに至つて夢窓疎石その人は如何なる人であつたかを見ねばなるまい。文保二年彼年四十四才、土佐の五台山に吸江庵を創立して此處に住した。北条高時の生母覚海尼より懇得な招待をうけて、翌年鎌倉に帰つたが、嘉曆二年には高時の請により、鎌倉五山の一つである浄智寺に住した。ついで高時は彼を円覚寺に請じた。このやうに彼は北条氏に篤く尊信せられ十分な優遇を受けてゐるのであるが、間もなく元弘三年五月鎌倉陥り、高時は滅亡した。夢窓この時五十九才。彼は鎌倉にあって北条の冥福を祈らねばならない。しかるに彼は後醍醐天皇より宸筆の御消足をたまはり、之を光榮として、本紙は甲斐の恵林寺に秘蔵し、その写しを携へて上京し、勅命により臨川寺を管領し、ついで南禅寺に再任した。建武元年十月天皇南禅

寺に行幸せられると、門まで出て御迎へ申上げ丁寧な御待遇申上げて、翌日は御礼の爲參内、仏像経録墨蹟などを献上した。後醍醐天皇の御信任の篤さと彼の思遇に感激する態度がわかるのである。しかるに建武中興の業は間もなく足利によつて破れて、延元元年天皇吉野に遷幸あつて、艱難のうちに崩御遊ばされるのであるから、彼自ら専ら、御菩提をとぶらい奉るべきであらう。しかるに彼は政權をとつた足利によつて、臨川寺に招請されて、幕府に迎へられ、賓師を以て好遇されるのである。まことに不思議な行動といはねばならぬ。彼は足利に勧めて後醍醐天皇の冥福を祈らんが爲に天龍寺を建立させる。これが頗る大規模豪華を極めたものであり、天下の耳目を聳動し、世間の反感を買ふに至つたことは前述の如く太平記に見えて明らかである。当時高氏は開山である彼に書状を送り、高氏の一家は、永久に此の寺を保護することを申出たのである。彼は之を喜び高氏を尊敬し、その申出に感激したのである。足利の彼に對する好遇と彼の足利に對する尊敬の状況はこれによつて明らかであらう。以上によつて夢窓疎石なる人物をみるに、北条氏の天下である時は、北条の賓師として厚遇され、後醍醐天皇によつて北条氏滅んで建武中興なり、そのお招きを受けるや彼は之を光榮とし、北条は見棄てて直ちに之が傘下に走つて手厚い待遇を受けるのであり又足利高氏によつて中興の業やぶれ、足利が政權をとると、またまた賓師を以て迎へられてその優遇をうけるのであり、足利にすめて天龍寺を建てしめば、それはあまりにも豪奢であつて識者の非難を招くものであつたが、永久に此の寺を保護するといふ足利の申出に對しては、いたく感激し高氏を尊敬するのである。之によつて之をみるに夢窓疎石といふ人物は、相對立する政治勢力のもとを巧妙に遊泳して身の安全と富貴を図るのみでなく、力を失ひ没落してゆくものは之を見棄てて何等顧慮する所ないのであり、新に興隆する

勢力を明確に察知し巧に之に取り入り、媚びへつらつてその優遇を得、豪華な生活をおくつて世間に威張り識者の非難を招く、およそかういふ不思議な俗物と、夢窓を断ぜざるを得ないのである。

鹿苑寺・金閣はかかる人物の創始する作庭の流れを汲んで権謀と術数あます所なく、道義を踏みがちつて吉野の君臣を欺むき、逆境苦難に陥れて、己は驕奢僭上の生活をなさうとする足利義満によつて、大土木を起して構築された所である。而して其の土地をいへばこれはもともと西園寺家の北山の別荘であつて、西園寺家歴代のこの別荘既に広大にして豪華を極め頼通の宇治の別荘をしのぐものでもあつた事は増鏡に述べておる通りであらうが、又その主たる西園寺家なるものもまた終始幕府と結托して、その強大なる権勢を背景に朝廷に重きをなし、驕奢な生活をなしたものであることは前述の如くである。かういふことであつてみれば鹿苑寺・金閣にまつはる印象は、実に巧妙に世間をわたり、権勢に媚びへつらひ、常に名声と富貴を得て天下を見下し、驕奢な生活をおくつて他の悲惨を顧みない、涙なきまことに巧な遊泳といふことにならざるを得ないのであらう。

(三) 日本の哀しみ

十六歳の日記は執筆当時の発表でなく、大正十四年二十七歳の時に偶然の機会に発見されたものをそのまま発表したといふのであつてみれば、多少の変改増減をいふむきもあるものの、其のおほむねに於いては十六歳の当時のものとみてよいであらう。十六歳の日記これを見るに、特殊な才能と知識を持ちながら、お人よしで世渡りの下手な為、何もかも失敗に失敗を重ね、次第に家産も蕩尽してついに半身不随のまま死の病床にある老人とこの人と共に生きるしか仕方のない孤独な少年の日常が描かれてゐるのである。ここには

世間を巧に遊泳して富と地位を得るといふことは片鱗も見えず、それに対する羨望、嫉妬、ともに存しない。鋭いとまでに感じられる描写を通して身に迫つてくるものは、人生の終末の迫り来つた者と、今始まつたばかりの者によつて漂はされる「哀しみ」の切実感であらう。

「ああ、祖父は一生の間なにか一つこころざしを遂げず、手を下したことは、何もかも失敗ばかり、その心中はどうだらう。ああ、ようこそこの逆境で七十五まで生きてゐて下さつた。心臓の丈夫さ（祖父が悲しみに堪へて長生きすることが出来たのは、心臓が丈夫だからだと、私は思つてゐたのです）何人もの子や孫に先立たれ、話相手もなし、見ることも聞くこともない。（盲目で耳が遠いのです）全くの孤独だ。孤独の悲哀——とは祖父のことだ。

『泣いて暮してました。』と言はれる口癖も、祖父にあつては真情なんだ。』

とある如く祖父の孤独・悲哀を切々と描き出して、それに対して少年はああと嘆じてゐるのである。しかしながらこの孤独と悲哀に沈む者には又あはれみとやさしさ、思ひやりが共生してゐることも次の如く書かれてゐることで明らかであらう。

「祖父のやさしい心は時々現はれる。今朝も、おみやが、『子産れ餅を三十拵へときました。』と思はん所からお祝ひをくれやはるの、足らんやうになりました。……』と言ふと『——お前とこみたいな家やのに、そない方々からお祝ひが来るか。』後は何やら、泣聲に涙が交つて嬉し泣きしてゐられる」

いま一つこの日記で注目しておきたいのは、「この家は北条泰時から出て七百年も続いたんやさかい、相変らず続きます。ばたばたと昔の盛大に戻る」とあることである。北条泰時といふ人名はかくて、自分の祖先の名として少年の日より川端の脳裡にあることにな

つたのであらう。この承久の変に際しての幕府方の総大将、北条泰時に対して敵烈な批判をあびせたのは明恵上人であつたが、「葎木市で」の末尾に川端は「私は王朝以降の古典もただに読んだ。音読することも多かつた。その音読の声は、老耆の祖父と二人きりで、さびしい田舎家に少年の、念仏、称名であり、傷声、哀号でもあつたのかも知れない。そしてわれを忘れたのであつた。『雲を出でて、われにともなふ冬の月、風や身にしむ、雪や冷めたき』（明恵上人歌）」と書いてゐる。この「雲を出でて」の歌こそ川端が「美しい日本と私」の冒頭に掲げて、日本の心、己の文学精神を示すものとし、又「やさしい思ひやり」の歌としたものである。十六歳の日記の作者は當時を思ひ出してこの歌を附記せずにはいられなかつたのである。「菊地さんが口火を切り、会ふ人に吹聴もして下さつたので、私は『招魂祭一景』の作者として知られるやうになつた。またこの短篇が菊地さんの思着を蒙る契機となつた」といひ又『招魂祭一景』は私が初めて文壇の話題に上つた作品であり、原稿を賣る手がかりも與へられた作品である」といふ「招魂祭一景」は「馬の背のお光一人、寂しい所に置き残されて、泣き出すべきなをぼんやり忘れていたようでもあつた。」「お光の日々、現の身が哀れに荒めば、荒むほど、夢は美しくなりまざる。でも、もう夢と現との架け橋なんぞ信じはしない。そのかわり、望み次第の時に、天馬に跨がり空を夢へ飛ぶのであつた。」に象徴されるお光は勿論のこと、花やかな存在の桜子も「乞食みたいな風をした」留子も、留子に「お光さん……：伊作なんかに騙されちゃ駄目よ」と言はれ、「爽快な姿を真中に現はし、高く口笛を吹く」伊作にしたつて所詮は曲馬団の芸人であつて、世を巧にわたり権勢富貴に媚びてその余沢にありつく者の小型亜流ですらもない。それ等のものには無縁であり、羨望すらなく、むしろ世の「寂しい所」にあつて身の哀しさをしみじみ

とかみしめてゐる者なのである。『伊豆の踊子』は私には稀なモデル小説である」と自らいひ、「『伊豆の踊子』の作者であることを幸運と思ふのが素直であるとは、よくわかつてゐる。『伊豆の踊子』のやうに『愛される作品』は、作家の生涯に望んでも得られるとはかぎらない。作家の質や才だけでは與へられない。『伊豆の踊子』の場合は、旅芸人が伊豆に旅をしてゐて、そしてめぐりあつた。このめぐりあひが必然であつたか、偶然であつたか、この問ひかけは人間の刻々の生存に問ひかけるのにひとしく、人間の一生に問ひかけるのにひとしく、私の答へは定まらない」と「伊豆の踊子の作者」でいふ「伊豆の踊子」は「私は身を誤つた果てに落ちぶれてしまひました」といふ旅芸人の男を中心に、小学校も出てゐないで流浪してゐる妹、旅の空で流産して、体も回復しないままの妻とその母親それに十七の雇の娘の一行五人の旅芸人と「自分の性質が孤兒根性で歪んでゐると敵しい反省を重ね、その息苦しい憂鬱に堪へ切れないで、伊豆の旅に出て来てゐる」学生との間に天城峠より下田の港に至る間にかもし出される、旅の道連れ、ほのかな愛情にあたためられた、素朴な親切とやさしい思ひやりを「踊子やその連れの旅芸人に対する、私の感謝を通して書かれ」てゐるのであり、「私の感謝が作品の基調をなしてゐる。素直で単純な感謝であるやうに思」はれるのである。従つてこの作品の登場人物に矚る豪華な人物の出て来ないのはいふまでもなく、いずれも、それぞれに親切であはれに哀しい人々である。この小説はあはれにやさしい思ひやりの心をもち、孤独に悩む旅人の目をもつて見られた人々の小説であるといつてもよい所がある。旅人の目によつて眺められた小説といへば一連の浅草物もさうであらうが、その代表的な作品と目される「浅草紅団」を見るに、鋭く張りきつた弓子にも、深淵と虚無とを覗いてゐるようなお春にも、白く冴えた刃物の感触に生きたがる銀猫の梅

吉も、十四の賣春婦の無垢な命にかき立てられた彦も、崩折れたり疲れたりすることを知らない民衆の強靱な生の意欲のみずみずしきを生きる者として、描いてある所もあるが、それは彼等を愛し過ぎる程愛しながら結局は傍觀者一旅人としての目をもつて語り描いてあるのである。そこにこそ、芭蕉の「一つ家に遊女も寝たり萩と月」の如く、生きるものの哀しさを漂はせること一層なのである。乞食がもらいためた残飯のそのまた食べ残りを一銭二銭と買いに来る細民の生活や、僅か十四歳の少女に躰を賣らせて口に糊してゐる一家を紹介しても、そこには、お春の話に一種のつましやかさと優しい気持とが失はれてゐないやうに、この作品もやはり世間を巧に泳ぎ現実の富と力をつかんでゐてそれに奢る者を描くには、作者の目は哀しさにうるみすぎであることを証してゐる。弓子によつてつけられた犬によつて守られた気のふれた賣春婦お花、その前身とも思はれる娘の登場する作品は「空に動く灯」であるが、これは「抒情歌」と共に川端の「死」に対する姿勢と思想が仏典をかりて語られる。万物一如・輪廻転生の思想がむしろ生のままに出てくる作品であるが、「空に動く灯」の方は震災で焼け出されて焼けビルの小学校に避難して、行くあてのない人々を描いたものであるから、勿論そこには哀しい生の営みがあり、互のいたはりあいがあつても傲慢驕奢のないのは当然であらう。ついでに「抒情歌」は靈感と予知能力を持った天才少女であつた語り手が、自分を棄てて他の女にはしりやがて死んだ恋人に、あの世に向つて話しかけるところの生のはかなさ、万物一如の心であつて「輪廻転生の教へほど豊かな夢を織りこんだおときばなしはこの世にはないと私には思はれます。人間が作つた一番美しい愛の抒情詩だと思はれます」とある如くこの作品自身「一番美しい愛の抒情歌であつて、愛の抒情歌に驕慢が出てくる余地のないことは当然であらう。文学的自叙伝に「近作では

『抒情歌』をもつとも愛してゐるが、出来るだけ、いやらしいものを書いてやれと、いささか意地悪まぎれの作品であつて、それを尚美しいと批判されると、情なくなる。」といふ「禽獸」も「動物の生命や生態をおもちやにして、一つの理想の鑄型を目標と定め、人工的に、畸形的に育てる」こともその「方が、悲しい純潔であり、神のやうな爽かきがあると思ふのだ」とある所に何で現実の人間関係に権勢の坐を占めて豪奢に振舞ふ事の意味があらうか。権勢富貴が語られず哀愁の語られるのも当然であらう。次に「雪国」についていへば、この作品の主人公であるが鏡の役を果たすに過ぎない島村といふ人物の感覚を通して伝へられる駒子のひたむきな愛情、それはまさしく「徒勞」に終るものであるが、ここにも一旅人に過ぎない島村といふ人物との一期一会をひたむきに生きる駒子の生き方がいたはりと哀しさをもつて、しみじみと描き出されるのであつて、この何回にもわたつて書き継がれた長編もついに傲慢と驕奢も巧な世間遊泳による幸運も描出される余地はなかつたのである。巧に要領よく世間の陽の当る場所のみを涉り歩く人物とは無縁であつたのである。

以上川端の戦前の作品の代表的なものの二三に就いて、その中に傲慢驕奢のものが描かれず、又世間の陽の当る所のみを巧に遊泳して、身を処するに狡猾に、富貴を得るに敏捷なものの書かれてゐない事を概観したのであるが、これはまた戦後の作品に就いてもいへることであらう。例へば「千羽鶴」にしても、菊治と太田未亡人、文字稻村令嬢に傲慢驕奢なく、栗本だつて嫉妬の意地悪があり、多少の敵意が描かれているのみであらう。「山の音」にしても同様であつて、修一に身勝手を見ても驕慢とは言ひ難く、かへつて周囲の哀愁に泣くであらうし、「古都」の番頭植村にしても、たかの知れた小悪党にもなりきれぬものにすぎない。むしろささやかな哀しい

あはれな人生を生きるものに過ぎない、「日月も」の松子の母も「女であること」の有田も自分のご都合によつて泳いだとはいへないであらう。次に、「美しさと哀しみ」とは表題通り妖しい美しさと哀しみを生きる人々である。この作品に夢窓疎石の作庭と伝へられる西芳寺の裏山の石庭が出てくる。が其処では「けい子」によつて「あの家庭を破壊してやりたいんです。うちの先生の復讐のためですわ」といふ言葉の吐かれる場所になるのである。又「先生あの石組みは先生やあたしの命よりも、あんまり長過ぎますわ」「あたしは命の短い絵を描けばいいの……」「先生、私はなんでも変つてしまつて、消えるのがいいと思ひますわ」といふ言葉の續いて出てくる所でもある。夢窓疎石造作の石庭はこのやうに用ゐられてゐるのである。

四) 西園寺と川端

川端康成が「招魂祭一景」を書いて菊池寛に認められ、作者として知られるやうになつたのは大正十年のことであつて、丁度その翌年は元老山県有朋薨じて、西園寺公望が門地比類なき元老として絶対最高の政治指導者として天下を左右するに至る時なのである。つまり戦前の川端の文学活動の時代は、正しく日本の政治が西園寺の勢威の下にあつた時代と重なつてゐるのである。してみれば当時の国民のたれしもがさうであつたやうに、川端も亦西園寺の名が常に脳裏にあつたものと考へられる。その上川端は中世に心をいたす人やその文学的境地は中世に密着する所のあることは、いまさら「しぐれ」三部作等を挙げる必要もなく定評のある所、周知の通りであらう。又川端は少年の日、祖父から北条泰時の末裔なることを教へこまれていた事は十六歳の日記に見る通りであり、それからあらぬかノーベル賞受賞記念の講演「美しい日本の私」の時は、由緒ある羽

織に北条の紋所三ツ鱗をつけて、泰時の師であり、しかも政治的対立者であり、この上なき鋭き批判者である、明恵上人の歌、「雲を出でて我にともなふ冬の月風や身にしむ雪や冷めたき」を開口第一番に述べて、「私は揮毫をもとめられた折りに書くことがあります」としてこの歌の説明をすることによつて、己の文学精神をも明らかにしようとするものである。「私がこれを借りて揮毫しますのは、まことに心やさしい、思ひやりの歌とも受け取れるからであります」といひ「私はこれを自然、そして人間に対する、あたたかく、深いこまやかな思ひやりの歌として、しみじみとやさしい日本人の心の歌として、人に書いてあげてゐます」と述べてゐるのであつて、西園寺や北条に鋭く対立する明恵上人はしみじみとやさしい思ひやりの、日本人の心をもつた者として、川端は之を己が文学の心を示してくれるものと心得てゐるのである。以上のやうであつてみれば、川端にとつては「西園寺」といふときは、現前の公望一人にとどまらず、中世の西園寺家―それは鎌倉幕府と常に結託し、朝廷にとつては常に獅子心中の虫でありながら、幕府の勢威を背景に頭要の地位を常時確保して、朝野に臨み、他を圧倒して豪華な生活を送り傲慢に世を見下すものであるが―の歴史を背に負ひ、これを顕現するものと見ざるを得なかつたであらう。さて又一方川端は横光利一弔辞で「僕は日本の山河を魂として君の後を生きてゆく」といふ。このときの川端には、「四季折り折りの美に、自分が触れ目覚める時美にめぐりあふ幸ひを得た時には、親しい友が切に思はれ、このよろこびを共にしたいと願ふ、つまり美の感動が人なつかしい思ひやりを強く誘ひ出すのです。この友は、広く『人間』ともとれませう。『美しい日本の私』といふ『思ひやり』を『悲しさ』を『山河』――『四季折り折りの美に』に重ね合せてみずにはおれまい。そしてその思ひやりの人は、「敗戦後の私は日本古来の悲しみのなかに帰つて

ゆくばかりである。私は戦後の世相なるもの、風俗なるものを信じない。——近代小説の根柢の写実からも私は離れてしまいきうであつたらう(「哀愁」といひ、「私は常にみずからのかなしきみで日本人をかなしんで来たに過ぎない。敗戦によつてそのかなしみが骨身に徹つたのであらう。かへつて魂の自由と安住とは定まつた」)(全集第一巻あとがき)といふのである。川端は日本の山河の美にふれると、それは人なつかしい思ひやりを、日本古来の悲しみをうむものであり、敗戦はその事を骨身に徹させたといふのである。また同じ所で「私の作物は戦前戦後にいちじるしい変動はない」といふからには、この事においては戦前戦後を通じて一貫してゐるといつてよいだろう。

およそ世間遊泳には、判断と理智と計算が必要欠く可からざるものであつて、感情や情愛に流されてゐては判断に誤りが生じ、計算にくるいが来るであらう。遊泳は阿諛に似て酷薄でなくてはならぬ。乾燥して割切つた境地にあらねばならぬ。ここには思ひやりや哀しみの入り込む余地は寸分無く、涙にうるむ余裕は全く無いものと諦めねばならぬ。傲慢であり、驕奢であるためには他を顧みたり、思ひやりの心に哀しんでゐたりしてはならない。高く離れ聳えて耀いてゐなければならぬ。かかるが故に金閣は高く聳えて金色燦爛とひかりかがやいてゐるのである。しかるに川端はあはれの人、悲しみの、思ひやりの文学の人であつた。私^註はかつて川端の作品には、例へば「古都」をはじめとして、その舞台として京の風土が様々の形で用ゐる尽されておゐり、中には金閣鹿苑寺には、なりゆき上及ばねばならぬものがあるにもかかわらず、何故か金閣は避けて通つてあつて用ゐられぬことを、又金閣寺炎上も他の作家には用ゐられる事のかなりあるにもかかわらず、際物をかなり話題にする川端が少しも用ゐない事を不思議なこととした。しかし今や金閣鹿苑寺が西

園寺と夢窓疎石と幕府との結合の産物であつて、驕奢と傲慢、遊泳と富貴榮達の象徴ともいふべきものであることが明らかになつてみれば、日本の山河の美をみて悲しみをおぼえる川端の文学とは、そぐいの悪いものであり、或は無縁ともいふべきものであり、余程の技巧と趣向でもこらさぬ限り、川端の視野からはずれてゐるものであることが明らかになつた。しかもである。「寝静まつた谷の『冬の月』は日本の悲しきみで私を凍えさすやうであつた」といひ、「私は月があれば月を見る。しかし月を見ると、いつも日本のかなしきといふやうなものが身にしみる」と「月下の門」でいひ、又同じ「月下の門」で「このやうに日本の伝統を強く感じさせられたことはい。かなしみから伝統を感じるのも、私のセンチメンタルな性だらう」といふ川端はあの「冬の月」の和歌の作者であり、幕府の厳烈なる批判者でもある明恵上人の「夢の記」の断簡を坐右において「その冬の月のころは、日本の歴史小説をいくつか書かうと考へてゐた。例へば、後鳥羽院や明恵上人を主にして、定家や家隆などの歌人を配し、承久の乱のころとか……いつ手がつけられるやらわからない」(月下の門)といふのである。後鳥羽上皇は西園寺と結托する幕府と鋭く対立し、承久の変の惨敗によつて、哀しい「隠岐の島守」の生涯を送り給ひ、悲しみの涙のうちに遠島にその生涯をおへ給ふたのである。我々は徒然草の作者とともに、夢窓の心操、祖師の行迹に相違し、利を求めて権力に媚びるものに外ならぬと痛烈に批判した日野資明の兄弟資朝をして、西園寺実衡の尊敬し感嘆する西大寺の静然上人を「年が寄つたのですよ」と告げ、むく犬の老いさらばい、毛も禿げているのを、引つばつて来て「尊いものをお目にかけます」と西園寺内大臣に贈呈させ、川端と共に金閣を避けなければなるまい。

注一 平泉 澄著。原書房刊。一五九頁以下
注二 岡山県立短期大学紀要 昭和四十四年七月。